

津田左右吉「『東洋思想研究』第五號發刊への請願」

關 俊 史

【翻刻】

昭和九年に大學直屬の研究機関として設置せられた東洋思想研究室は、同十二年にその研究報告としての「東洋思想研究」第一卷を發刊し、十三年に第二卷を、十五年に第三卷を、續刊しましたが、第四卷は、掲載すべき諸論文がほゞ脱稿してゐたにか、はらず、戦争の擴大による国内情勢の急迫のため、出版の運びに至らず、戦後の混乱のや、鎮靜して来た二十五年になつて纔かに公にすることができました。さてこの報告の出版費は第一卷から第三卷までは校友相馬愛藏氏の好意による提供によつたのでありますが、第四卷は種々の事情を考慮して同氏に依頼することを避け、發行書肆である岩波書店にすべてを一任しました。ところが、かゝる出版物の

常として購読者が少數の学者に限られてゐるのと、戦後の特殊の事情のために、出版費は殆ど同書店の負擔となつたので、第五卷以下を同じ方法で出版することはできないことになりました。しかし東洋學の研究に相當の貢獻をしましたこの報告の公刊をこのまゝ、廢止するのは、学界のためにも、また早稲田大學の一研究機関である当研究室の任務としても、甚だ遺憾でありますので、続刊について種々苦慮しましたが、その好方法が見えられません。それで、報告の書物としての分量及び發行部数の最少限度に於ける出版費の見積りの提出を従來の發行書肆である岩波書店に求め、見積りによる出版費を大學に於いて支出せられんことを懇請するの止むなきに至りました。幸にこのことを許容せられ、早稲田大學に於

けるこの研究室の業績を学界に提出することができませんならば、それは啻に研究室の任務のためのみならず、学界のためにもまた幸であることを信じます。なほ附言しますが、この報告は最初は毎年刊行の豫定でありましたが、諸般の情勢はそれを困難にしましたので、室員の研究の進行如何により、二年もしくは三年に一冊を出版することに致したいと存じます。また上記の如く購讀者が僅少であり、且つなるべく多数を内外の大学研究室及び学会に寄贈したい考でありますから、書店の販賣によつて得る金額は僅少であらうと思はれますが、いくらかでもそれがありませんならば―書店から大学に納入するように取計ひたいと存じます。

岩波書店の見積り書を添へて、右懇請致します。

《凡例》

・ 標題は編集にあたり、假に付したもので、本來の資料は無題である。

・ 翻刻にあつては假名遣いは原文のままである。ただし、變體假名は現在の平假名に直した。漢字については可能な限り原文の表記を尊重したため、新舊字および表記に揺れがある。

・ 資料には多くの見せ消ちがあるが、津田左右吉が「岩波書店の見積り書」とともに大學に提出したであろう文章の翻刻を優先したため、採用しなかつた。

〈解題〉

本資料は津田左右吉の没後、常子夫人により早稲田大學圖書館に寄贈された津田左右吉未整理資料の一部である。この度、私立大學研究ブランディング事業により早稲田大學中央圖書館特別資料室に所藏されている津田左右吉未整理資料の整理を行っている。本資料は今回の整理作業以前に、過去に一應の整理がなされた痕跡があつた。しかし「東洋思想研究室の由來」という假題が施されていたところからすると、おそらく内容理解までは至らなかつたのであらう。そのため、今回の調査で本資料を翻刻し、津田左右吉研究の一助としてご報告できればと考えた次第である。

本資料は反故の原稿用紙を二分した紙背に、萬年筆に青インキを用いた津田の自筆である。一紙あたり縦十八・六五センチメートル×横十二・九センチメートルの三枚の紙片である。書者された時期はその内容から『東洋思想研究』第四號から第五號の間、すなわち一九四九年から一九五三年、津田が七十六歳から八十一歳の間であらうと

推定される。

資料内で津田も述べているが、當時は戦後で出版費が捻出できず『東洋思想研究』の第一號から第三號は校友の相馬愛藏の寄付により出版していた。當時の東洋思想研究室の事情については『東洋思想研究』第四號および、第五號の「あとがき」を参照せられたい。この資料はかかる第五號の「あとがき」にある「一般の經濟上の變動があつたため、當初の企畫を遂行することが困難になつたので、今回新たに本學の特殊の了解を得て」という部分の事情の一端を我々に示してくれる資料であるといえよう。

その後『東洋思想研究』第五號は五百部印刷され、そのうち四百部は早稲田大學で買い上げ、残りの百部は岩波書店から販賣されたことを記したメモが、東洋哲學研究室に眠っていた津田左右吉葬儀關係資料から発見されたため、あわせてご報告する。なお、本資料の原本は整理作業の後、公開する豫定であるため、暫しお待ち頂きたい。

東洋思想研究室は申し上げるまでもなく早稲田大學東洋哲學會の前身であり、津田がその機關誌である『東洋思想研究』を繼續させようとしていたことが本資料により窺える。それを早稲田大學東洋哲學會に所屬する學會員の方々にお伝えする必要性を鑑み、本資料の翻刻を『東洋の思想

津田左右吉』『東洋思想研究』第五號發刊への請願」(關)

と宗教』誌上に掲載する運びとなつたことを記しておく。今後も東洋哲學研究室や早稲田大學東洋哲學會に關係する津田左右吉未整理資料が発見された場合、分量の如何にも關わるが、誌上において繼續してご報告申し上げたい。

※本稿は平成二十六年年度私立大學研究ブランディング事業(舊私立大學戰略的研究基盤形成支援事業)「近代日本の人文學と東アジア文化圏―東アジアにおける人文學の危機と再生」第三研究グループ「早稲田大學と東アジア―人文學の再生に向かつて」の成果の一部である。

(キーワード) 津田左右吉、東洋思想研究、岩波書店、東洋哲學研究室